書評

亀山郁夫『大審問官スターリン』小学館，2006年，319頁

塩川伸明

著者，亀山郁夫はここ数年の間に，『磔のロシア』（岩波書店，2002年），『熱狂とユーフォリア』（平凡社，2003年），そして本書『大審問官スターリン』（小学館，2006年）を立て続けに世に問うた。これらはいわば亀山スターリン学3部作ともいうべき様相を呈している。その多産ぶりと華麗な文章にはただ賛嘆するほかない。

ところで，評者はロシア・ソ連政治史を専攻するものであって，文学研究には純然たる門外漢である。本書の主題となっているスターリン時代には深い関心をもっているが，その接近の仕方は，文学研究者たる著者のそれとは大きく隔たっている。他面では，著者と永年にわたる交友関係があるため，個人的には深い親近感を覚えるが，だからこそ，相当きつい悪口も平気で言いあえるような間柄である。[1] こういった事情からして，この小文は通常のバランスのとれた書評にはなりそうにない。本誌の編集委員会がどういう意図でこのような「異例の書評者」を起用したのかは分からないが，とにかくこうしたわけで，以下の文章はかなり型破りのものとなることを予めお断わりしておきたい。

さて，改めていうまでもないことだが，スターリンおよびその時代には，グロテスクで妖気漂うおどろおどろしい雰囲気がつきまとっている。そのため，多くの人々がこの時代についてある種の神話的イメージを懐くのはごく自然なことである。歴史家はそうした神話の大半が実際には根拠の乏しいものだということを暴く「脱神話化」を生業としているが，亀山の仕事はそれとは全く異質である。というのも，同時代のソ連の芸術家たちやその精神的衣鉢を継ぐ現代ロシア知識人たちがどのような神話的イメージを懐いているかを，あたかも彼ら自身になりかわったかのごとくにヴィヴィッドに描き出しているからである。一言でいって，スターリンにまつわる神話世界を――脱構築ではなくて――再構築し，再現前（リプリゼント）＝表象してみせるのが亀山の真骨頂といえよう。

前著『磔のロシア』の中に，次のような一節がある。

「非芸術の化身たる権力におもねる彼ら〔芸術家たち〕は，みずからの『二枚舌』の鍛錬と想像力への沈潜において，独裁者と豊かに一体化しはじめた。芸術家は，芸術のもつ権力への志向ゆえに，あるいは，受容者を支配したいという止みがたい欲望ゆえに，深く独裁者と一体化することができたともいえる」。[2]

この言葉に倣っていえば，亀山自身も，対象としてのロシア知識人たちと豊かにかつ深く一体化しているようにみえる。亀山の仕事はスターリン時代の芸術を対象とした一種の神話学ともいうべきものだが，ときとして，著者が神話の冷静な解剖者（外に立つ観察者）なのか，それとも当事者たるロシア知識人と一体化して自ら神話を語り，創造しているのか，判然としがたいところがある。

ここまでは前2著と共通する特徴だが，本書はいくつかの点でこれまでの2著と多少トーンが異なっている面があり，それは本書の魅力であると同時に，ある種の危うさを増し，見ようによっては一歩後退ではないかと感じさせるところもないではない。

本書の「エピローグ」に次のような文章がある。

「本書を執筆しながら，私は初めてスターリンに対する憎しみを感じた〔…〕。前二著を書いているときには生まれなかった新しい心境である。そしてそう感じられることが私にはなぜか新鮮でうれしかった」（308頁）。

どうしてこういうことを今頃言わなくてはならないのか，というのが率直な感想である。スターリン批判から丸半世紀経つ。「スターリンに対する憎しみ」は，今頃になって「初めて生まれる」もの，「新鮮」なものではなくて，数十年前にこの国の歴史と文化に引きつけられたとき以来の当然の出発点でなくてはならないはずではなかろうか。問題はそれだけではない。スターリンやその取り巻きたちをひたすら邪悪で，残忍で，知的に低水準な人間として描き出すのは，真の意味での恐ろしさを描くことにならない。アネクドートの類にはそうしたものが少なくないが，[3] それはどことなく，赤提灯で上司の悪口を言って鬱憤を晴らすサラリーマンに似ている。そうしたものも当事者によって語られるときにはそれなりの切実さをもっており，安易に笑い飛ばすべきではないが，第三者がそれをそのまま担ぎまわるのは，それこそ安直だと思われてならない。「スターリンに対する憎しみ」を露わにし，

個人としてのスターリンを邪悪な人間として描けば描くほど，ソ連の歴史はギリシャ悲劇的な荘重さから離れ，ちゃちなホラー映画のようなものへと矮小化してしまいかねない。

本書の前2著とのもう一つの違いとして，本書は外見的にはあたかも歴史書であるかのように読めるところがある。歴史的人物や事件について注解を付けたり，政治機構の図解や略年表を付けるといった体裁もそうした印象を読者に与えるだろう。また，エピローグには次のような個所がある。『スターリンという神話』の著者ボーレフは「信じるもよし，信じないもよし」とする立場に立ったが，[4] 自分はそのような立場をとることをよしとしたくなかったというのである（306頁）。ということは，信じられるか信じられないか分からない噂，風説，伝聞，推測等々をコメント抜きで投げ出して，その信憑性については読者の判断に任せる――これがボーレフの態度である――のではなく，ここに「事実」がある，それは信じられる情報だ，という書き方をとろうとしたという意味にとれる。これは本書を歴史書として読んでほしいというメッセージであるかのように受け取れる。評者にはむしろボーレフのような「信じるもよし，信じないもよし」という態度の方が潔いものと感じられ，「ここに信じられるべき事実がある」というものの言い方は胡散臭く，歴史というものについて誤ったイメージを読者に植え付けかねないという懸念をいだく。

もっとも，今引用した個所のすぐ後には，スターリンによる一人称モノローグという手法について，これは「歴史書がけっしてとりえない手法である」とあり，「一つの文学的営み」と自己を位置づけているので，歴史書との性格の違いは著者によっても意識されていることが窺える。しかし，それにしても，本書の語り口は，本書を「神話の解剖」よりもむしろ「自ら神話を語り，創造する」という性格の本にしているように思われてならない。それが本書の個性でもある。しかし，これは読者を惑わしかねない危うい目論見ではないかというのが評者の懸念である。亀山自身がどう考えているかはさておき，本書は専門家でない広汎な一般読者を対象として書かれているが，そうした読者は本書を歴史書として読む可能性が高いのではなかろうか。しかも，そうした一般読者の間には，「ソ連解体によってこれまで秘密にされていた新資料が大量に公開され，歴史像が一挙かつ全面的に転覆されつつあるのではないか」といった先入観が流布しているから，その先入観に立つなら，「これまで知られていなかった歴史事実に関する新資料に基づいたショッキングな解明」という風に受けとられる可能性も高い。

もし仮に本書を歴史書として読むなら，率直にいって非常に大きな違和感があると言わねばならない。個々の歴史事実に関する明らかに間違った記述も少なくないし，論争的な解釈や推測をあまりにも大胆な断定調の文章で書いている個所も多い。[5] もっとも，こうした点は，学術書ではなく一般読者向けの書物だからということで正当化もできよう。より大きな問題は，取り上げられているエピソードの多く（フルンゼの謎めいた死，キーロフ暗殺事件，スターリン＝帝政スパイ説，ゴーリキー毒殺説，スターリン個人のユダヤ人に対する偏見等々）が，決して新説とか新発見ではなく，むしろ古くから何度となく取りざたされてきたものであり，しかもいつまで経っても決め手を欠くために，ガセネタとかゴシップの域を出ないものばかりだという点である。[6]

ここでわれわれは，歴史学のアプローチと神話学のアプローチの違いという問題に向かわねばならない。本書についてバランスのとれた書評を書いた沼野充義は，「どうしてそのような異常なたった一人の人物〔スターリンやヒットラーのような〕に無数の人々や巨大な国家が長期にわたって支配されてしまうのか」という謎に言及し，亀山のアプローチの独自性は，「あくまでもスターリンその人にとりつかれたかのように，『スターリンと芸術家たちのおりなす圧倒的な非対称性を古典的な一点透視法で描くこと』を目指した」点にあると書いている。[7] 亀山のアプローチがそのようなものであるのは沼野のいうとおりだが，問題は，ここで出されている謎に迫るのにそうしたアプローチをとることの意味にある。

いうまでもないことだが，王が王として君臨するのは，王個人の資質の故ではない。むしろ，他の人々が王に対して臣下としての態度をとるからこそ，王は王となるのである。同様に，貨幣が貨幣として機能するのは，その中に含まれている価値のためではない。金貨が不換紙幣にとって代わられ，さらにペーパーレス決済に代わられる世の中ではなおさらである。ただのひとかけらの金塊も含んでいない紙片や電子情報が貨幣としての役割を果たすのは，ひとえに他の商品が貨幣によって価値を測られるという社会関係があるからにほかならない。[8] これらと同様に，スターリンがスターリンとなったのは何によるかと問うならば，同時代の政治家・知識人・一般大衆等々が彼に対してとった様々な態度の総体の産物が彼をしてスターリンたらしめたというべきだろう。「どうして〔…〕無数の人々や巨大な国家が〔…〕支配されてしまうのか」と

いう問いに対して，スターリン自身の性格，精神病理，秘めたるトラウマ等々を追求しようというのは，王の権威を探求しようとしてその身体細胞からDNAを抽出しようとしたり，貨幣の意義を知ろうとして紙幣や電子情報の中に純金が何万分の一ミリグラムでも含まれていないかと探るようなものではないだろうか。[9]

こういう風に考えると，歴史や社会科学の方法と本書のような作業との性格の違いがはっきりしてくる。だが，観点を変えてみるなら，本書にはスターリンをスターリンたらしめた謎の一端を解明するための材料が豊富に含まれている。それというのも，本書に描き出されているスターリンに関する虚像・幻想・憶測等々が多くのロシア知識人に分かちもたれ，その真偽をめぐって人々が論争したり，思弁と憶測を重ねたり，胸を騒がせ続けてきたという事実そのものが，ロシア知識人の精神世界の大きな構成部分をなしているからである。そしてそうしたロシア知識人の精神構造は，まさにスターリンをスターリンたらしめた一つの要因をなしているのである。

亀山はロシア知識人の書物を深く読み解き，また彼らと内面にわたる交流をして，ロシア知識人の精神世界の内奥に及ぶ理解をもつという点で，余人に真似のできない境地に達している人である。そうであるが故に，本書で提出されているスターリン像は，たとえ実像ではなく虚像や幻想だとしても，それは単に亀山個人の勝手な妄想の産物ではなく，多数のロシア知識人の懐いている虚像ないし幻想――いうなれば，一種の共同幻想――でもあるという性格を帯びている。評者が本書を神話学の書として高く評価するのは，そうした理由からである。この観点からいえば，その幻想が「歴史としての実像」とどの程度近いかなどということは，本質的にはどうでもよいことなのだろう。唯一危惧するのは，本書の体裁からして，少なからぬ読者がこの神話学を――場合によっては，描かれている神話自体をも――「歴史的事実」と受けとりかねないという点である。

このように考えるなら，本書は本来ならば『幻視の中のスターリン』とでも題されるのが適切だったろう。そしてまた，近年の亀山が精力的に遂行している作業は，「スターリン学」ではなく「ロシア・インテリゲンチャ学」――その一環として，「スターリン神話を切り口としたロシア文化学」――と名付けられるべきである。「ロシア・インテリゲンチャ学」の構築者として，亀山ほど深い地点に達して，多彩かつ多産な業績をあげている人は稀である。そのような「ロシア・インテリゲンチャ学」の大家たる亀山が，歴史家まがいの仕事に乗り出すことで，その貴重な才能を乱費したりすることのないよう，永年の旧友として切に祈りたい。

（しおかわ　のぶあき，東京大学）

注

1 型破りの書評を書くことの説明として敢えて個人的事情に触れたが，著者名を敬称略で記すのは私のいつもの流儀であり，殊更に近い間柄の場合に限った特例ではない。

2 亀山郁夫『磔のロシア――スターリンと芸術家たち』岩波書店，2002年，はじめに，x頁。

3 亀山の訳したユーリイ・ボーレフ『スターリンという神話』（岩波書店，1997年）にも，その種のものが多数収録されている。

4 ボーレフ『スターリンという神話』，著者より，vii頁。ボーレフはまた，同書にまとめられているのは「都市の知識人フォークロアともいうべきもの」であり，「本来的に歴史の世界というより，芸術の世界に属して」いると述べている。vi-vii頁。

5 いくつかの例をあげる。19頁に「国家元首すなわち〔…〕人民委員会議の議長」とあるが，国家元首と呼ばれるべきなのは人民委員会議議長ではなく，ソヴェト中央執行委員会議長である。34頁に，文芸政策に関する1925年決定が7年後の決定と「同じもくろみをもつもの」という記述があるが，これはあまりにも飛躍した暴論である。108頁冒頭の1934年12月1日指令の紹介は法的観点からみて不正確であり，その後に続く第17回党大会での中央委員選挙についての記述は，繰り返しささやかれてはいるものの実証されたことのない憶説である。198頁にメルカデルが刑期終了後「キューバに向かい，晩年はソ連国内で過ごした」とあるのは順序が逆で，先ずソ連に向かい晩年をキューバで過ごしたのが事実である。214頁に「二十三の共和国」とあるが，ソ連の共和国の数が23になったことはない。226頁に「パスポートに書かれていたのは国籍であるから，民族という概念を回避する行為」とあるが，ロシア語のнациональность は英語のnationalitiyと違って「国籍」ではなく「民族」であり，パスポートに「民族」が記載されていたのは常識である。282頁の「革命二十五周年」は35周年の誤り。284頁にある「『幹部会政治局』と呼ばれる大規模な〔…〕機関」は「幹部会」か，もしくは「『幹部会ビューロー』と呼ばれる小規模な機関」のどちらかでなくてはならない。310頁の組織図は基本的に共産党組織に関わるものであるにもかかわらず，国家機関たる人民委員会議と各人民委員部が紛れ込んでいるのは初歩的誤りである。これらは，たまたま眼にとまったいくつかの例に過ぎない。

6 最近の歴史家による脱神話化的作業の例として，キーロフ暗殺については，マシュー・レノー「キーロフ殺害の鍵は北大図書館の本棚にあり」『スラブ研究センターニュース』104号（2006），ユダヤ人問題については，長尾広視「ソ連のユダヤ人――スターリンの『最終的解決』に関する考察」『ロシア史研究』第69号（2001），同

「『コスモポリタン批判』再考――ソ連演劇界にみるスターリン統治の論理」『思想』2007年4月号など参照。

[7] 『毎日新聞』2006年2月19日。

[8] いわずもがなの蛇足だが，ここに書いたのは，『資本論』第1巻におけるマルクスの洞察のパロディである。

[9] このようにいうと，「仮にスターリンがいなくても〔…〕ロシアはいずれにせよ同じような悲劇を体験しただろう，という論法」（この表現は，前掲の沼野書評のもの）ととられるかもしれない。だが，ここで言いたいのはそういうことではない。特異な個人が果たす役割というものは実際にあるのであって，「社会全体のシステムや人々の意識」の解明がそれを無にすることはありえない。ただ，それを弁えた上で，どこまで「社会全体のシステム」からの解明がなされうるかをとことんまでつきつめてみようとするのが歴史家や社会科学者の営みである。